

平成 6 年度

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

高城遺跡 B 地点

高 城 遺 跡

片山東屋敷廻遺跡

垂 水 遺 跡

1995年3月

吹田市教育委員会

序

本市におきましては、埋蔵文化財包蔵地が120余カ所も確認されており、さらに今後の調査の進展によりましてはさらに増加すると予想されます。一方、近年の急速な都市化の進展は土中に埋もれている貴重な資料の散逸を招くことが憂慮されます。

そのため、市教育委員会では、昭和49年度から文化庁及び大阪府教育委員会の御指導をいただき、国庫補助事業として埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

平成6年度におきましては、高城遺跡B地点、高城遺跡、片山東屋敷廻遺跡、垂水遺跡を対象として調査を行いました。高城遺跡B地点・高城遺跡では主に中世の遺構・遺物が、本格的な調査が初めて行われた片山東屋敷廻遺跡では奈良時代の遺構・遺物が検出され、今後の周辺の調査に期待が寄せられる成果を上げることができました。これらの成果を軸として、遺跡の重要性の周知、啓発を進め、いわゆる点から面へと広がりを持つ埋蔵文化財保護行政を推進したいと考えております。

今後、文化財保護行政を進めるに当たっては、誠意努力を傾ける所存ですが、市民の皆様方におかれましても、深い御理解と御協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成7年3月

吹田市教育委員会

教育長 長光達郎

例　　言

1. 本書は平成6年度国庫補助事業として実施した、高城遺跡B地点、高城遺跡、片山東屋敷廻遺跡、垂水遺跡の緊急発掘調査をまとめたものである。
2. 発掘調査地点は次のとおりである。

高城遺跡B地点	吹田市高城町1350-3
高城遺跡	吹田市高城町1401、1402-1
片山東屋敷廻遺跡	吹田市片山町4-2409-3
垂水遺跡	吹田市円山町168-28
3. 発掘資料の整理作業は、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館において実施した。
4. 本文の執筆は、第1・4章 増田真木、第2章 賀納章雄、第3章・1 花崎晶子、2～4 西本安秀が行った。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高は T.P.（東京湾標準潮位）を示す。
6. 発掘調査において、岡村芳江、気比泰男、奥野初子、宮田七一、宮田秀司氏をはじめ、多くの方々の協力を得ました。記して謝意を表します。

発掘調査参加者名簿

調査主体 吹田市教育委員会 教育長 長光達郎

調査指導 大阪府教育委員会文化財保護課 主幹 堀江門也・係長 濑川健・主査 山本彰

調査担当 吹田市教育委員会吹田市立博物館文化財保護係 増田真木・西本安秀・賀納章雄

調査員 大城道則・花崎晶子

調査補助員 喜田みゆき・福住日出雄・奥田俊幸・世木博・城田健一・山下晴尚

目 次

第1章 平成6年度市内遺跡発掘調査の実績	1
第2章 高城遺跡B地点・高城遺跡の発掘調査	3
第3章 片山東屋敷廻遺跡の発掘調査	8
第4章 垂水遺跡の発掘調査	18
報告書抄録	20

挿 図 目 次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 高城遺跡B地点・高城遺跡発掘調査地周辺図	3
第3図 高城遺跡B地点調査区平面図	4
第4図 高城遺跡B地点土層断面図	4
第5図 T 2 内遺構平面図	5
第6図 出土遺物実測図	5
第7図 高城遺跡調査区平面図	6
第8図 高城遺跡土層断面図	7
第9図 高城遺跡遺構平面図	7
第10図 片山東屋敷廻遺跡発掘調査地周辺図	9
第11図 調査区平面図	10
第12図 土層断面図	12
第13図 土坑1 平面及び断面図	13
第14図 出土遺物実測図(1)	14
第15図 出土遺物実測図(2)	15
第16図 調査風景	17
第17図 垂水遺跡調査地周辺図	18
第18図 垂水遺跡調査区平面図	19
第19図 垂水遺跡調査トレンチ土層断面図	19

図 版 目 次

- 図版一 高城遺跡B地点・高城遺跡
- 図版二 片山東屋敷廻遺跡 1
- 図版三 片山東屋敷廻遺跡 2
- 図版四 片山東屋敷廻遺跡 3
- 図版五 片山東屋敷廻遺跡 4
- 図版六 片山東屋敷廻遺跡 5
- 図版七 片山東屋敷廻遺跡 6
- 図版八 垂水遺跡

第1章 平成6年度市内遺跡発掘調査の契機

吹田市では昭和49年度から、文化庁及び大阪府教育委員会の指導の基に市内の埋蔵文化財包蔵地における個人規模の開発等に対する緊急調査を国庫補助事業として実施してきた。当初は市内で特に開発の進行が著しい垂水町3丁目に所在する垂水南遺跡の調査が中心であったが、昭和55年度から事業の対象を市内一円に広げ、市内各所で急ピッチに進む開発工事への対応を図っている。平成6年度は高城遺跡B地点、高城遺跡、片山東屋敷廻遺跡、垂水遺跡の4か所について、個人住宅の建設工事に伴う発掘調査を実施した。

高城遺跡は高城町に所在し、平成4年度末に新たに確認された遺跡である。市域北半部を占める千里丘陵から沖積平野への地形的変換点に位置し、平安時代の遺構及び平安時代から中世にかけての遺物が確認されている。その後、周辺地における調査等によっても、遺構・遺物が確認され、遺跡範囲がさらに北東方向に広がることが明らかとなり、現在南北150m、東西60mの範囲の展開が確認されている。今回の調査は遺跡西南の高城町1401、1402-1において、個人住宅建設に伴う確認調査として実施したものである。

高城遺跡B地点は高城遺跡の西南約140mの高城町1350-3における個人住宅の建設工事に伴い、高城遺跡周辺地であり、遺構等の展開する可能性があることから試掘調査を実施したとこ



第1図 調査地点位置図（明治18年作成地図・調査地点）

ろ、中世の遺物包含層を確認したために、新規発見の遺跡として届出して調査を実施したものである。

市域で古くから住宅等の開発が進んだ地域であることから、遺跡の状況が明らかでなかった吹田市東南部の旧吹田町域においても、ここ数年間で住宅の建て替え等の開発が徐々に増加し、それに伴う事前調査等によって高浜遺跡、高城遺跡等の遺跡の新規発見、あるいは範囲の拡大が増加しており、今年度においても高城遺跡B・C地点（平安時代～中世）、昭和町遺跡（古墳時代）等が新たに確認された。従来、この一帯は吹田砂堆上の都呂須遺跡等が確認されていたが、それより東方では周知された遺跡は少なく、操車場遺跡等が知られている程度であった。一帯の考古学的な状況は殆ど把握されていない状況であったが、近年の新たな遺跡の確認により、広範な地域に遺跡の展開する可能性が指摘されるようになってきた。

片山東屋敷廻遺跡は片山町4丁目の丘陵南斜面に位置する遺跡であり、周囲には古墳時代の須恵器窯跡が集中する地域である。遺跡は古墳時代の須恵器、土師器が採集されたことによって確認されたものであるが、その実体については明らかではなかった。今回の個人住宅建設に伴う調査地点、片山町4丁目2409-3は当初は遺跡の範囲外であったが、南接する地域であることから事前に試掘調査を実施したところ、遺構及び遺物の出土を確認したことから遺跡範囲の拡大の手続きを行い、調査を実施したものである。本遺跡の本格的な調査としては初めてのものである。

垂水遺跡は千里丘陵東南端の垂水町1丁目から円山町にかけての東西600m、南北400mの範囲に展開し、市内で最も早い段階に確認された遺跡の一つであるが、一帯は既に昭和初期に開発が開始され、現在は遺跡範囲の内、垂水神社境内地のみに旧状が残されている状況である。

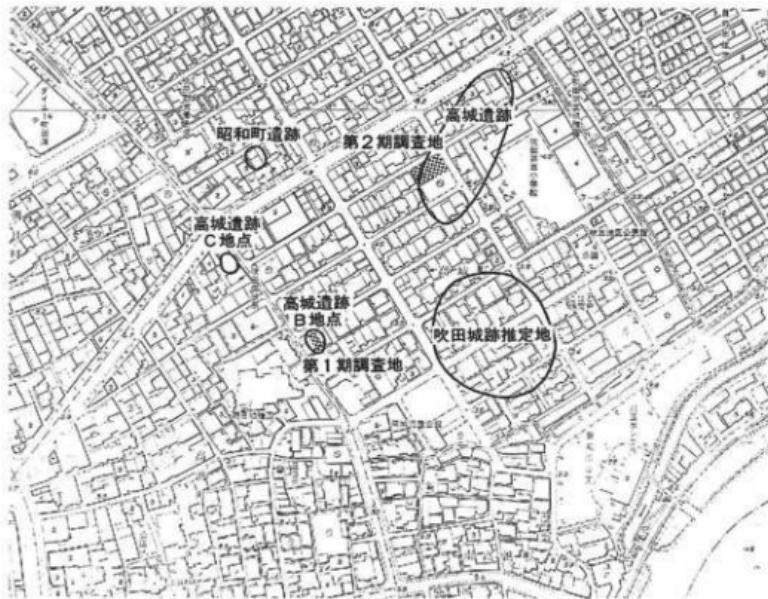
この神社境内地については市史編纂事業に伴い、関西大学考古学研究室によって昭和48年から51年にかけて発掘調査が実施され、旧石器時代、弥生時代、室町時代の遺構・遺物が確認されたが、特に弥生時代の集落については前期新段階から中期末の急激な増加を経て、後期畿内第5様式までその盛期が認められ、弥生時代集落を考える上で多くの問題を提供している。垂水遺跡については、その後、現在まで丘陵部分における調査を実施しているが、神社境内地以外では明確な遺構・遺物包含層等は確認されていない。一方、丘陵裾から沖積平野にかけての部分では中期を中心とする弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が現地表下2m近くの深い地点で確認されており、特に弥生時代の遺物の状況が良好なことから当該期の遺構が丘陵下にも展開している可能性が高く、丘陵上の遺構群や時期的にほぼ同時期の遺物が出土する、東方の都呂須遺跡、高浜遺跡等との関連も問題となってくるであろう。今回の調査は丘陵部分の円山町168-28において個人住宅建設に伴う事前の確認調査として実施したものである。

第2章 高城遺跡B地点・高城遺跡の発掘調査

1. 位置と環境

高城遺跡は、吹田市域北半を占める千里丘陵が、淀川・安威川の沖積作用によって形成された、市域南側に広がる沖積平野になだらかに埋没していく地形的変換点に位置する。沖積平野部にあっては、洪積粘土層が表土層下ごく浅いレベルで見られ、当遺跡西方約300mの地点を中心に広がる吹田砂堆と並んで、微高地的様相を示している。高城遺跡は、現在3地点でその包蔵地域が確認されており、高城遺跡及び高城遺跡C地点において平安時代から中世、高城遺跡B地点で中世の遺構・遺物を検出している。

平安時代以降の吹田は、8世紀末に淀川と三国川（現神崎川）をつなぐ運河が開削されたことにより、瀬戸内と京とを結ぶ水上交通上の要衝の1つとなり、その地域の重要度が増すこととなった。また、東寺領垂水庄や桜閑家領垂水西牧・東牧等をはじめとして荘園經營が盛んとなり、中世にかけて大規模な耕地開発が行われた。当遺跡周辺においても、承徳3年（1099）の史料「治部卿藤原通俊所領処分状」に初出する七条院領倉殿莊や興福寺領吹田莊等が展開しており、当遺跡もこれら荘園經營に何らか関連していた可能性が考えられる。



第2図 高城遺跡B地点・高城遺跡発掘調査地周辺地区 (1:5000)

2. 高城遺跡B地点の発掘調査

(第1期調査)

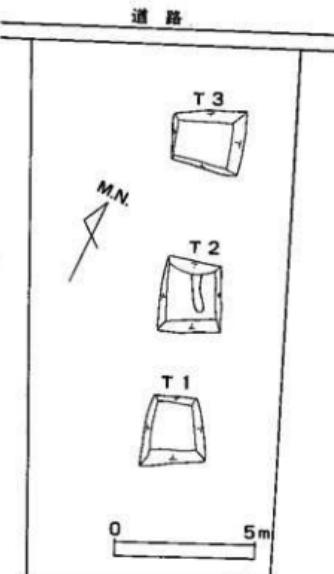
(1) 調査の経過

今回の発掘調査は、高城遺跡の周辺地であった当地において、住宅の建築が計画されたため、平成6年4月15日、事前に試掘調査を実施したところ、土師器、瓦器等の遺物を含む中世期の遺物包含層を確認した。これによって、当地を高城遺跡B地点として周知し、建築工事によって遺跡の破壊の考えられる部分について拡大調査を実施した。調査については、平成6年5月9日に調査トレンチを3か所設定し、重機を用いて盛土等を掘削した後、遺構・遺物の検出に努め、写真撮影・実測の後、埋め戻して終了した。

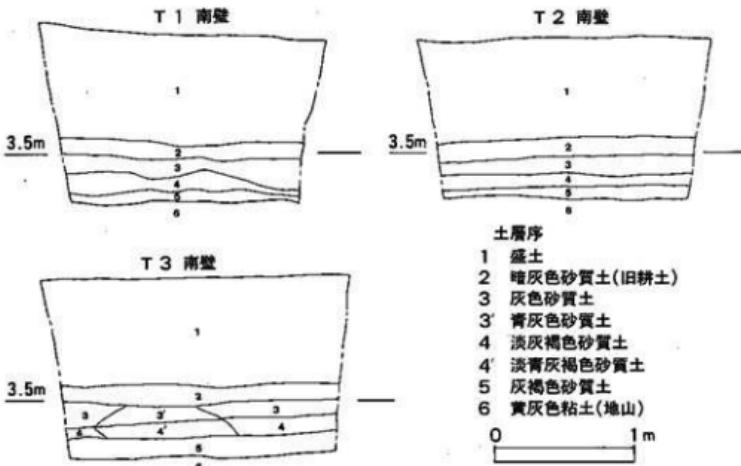
(2) 調査の成果

a. 基本土層序

調査区の土層序は、盛土層、旧耕土層以下、灰色砂質土層（第3層）、淡灰褐色砂質土層（第4層）である。



第3図 高城遺跡B地点調査区平面図

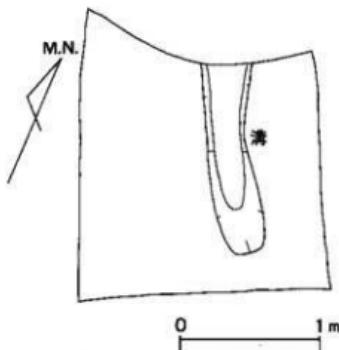


第4図 高城遺跡B地点土層断面図

層)、中世遺物包含層である灰褐色砂質土層(第5層)、地山層である黄灰色粘土層(第6層)がほぼ水平に堆積していた。

b. 造構

T 2 内において、地山層をベースとして、溝を1条検出した。溝は検出部分で約20cmの深さを測り、方位はN-28°-Wを示していた。また、埋土中には瓦器、土師器等の遺物を含んでいた。



第5図 T 2内遺構平面図

c. 遺物

各トレンチ内において、遺物包含層である第5層から多数の土器片を検出した。これらの多くは小片であるが、図化できたものを第6図に示す。

(1・2 土師器皿)

復元口径が10cm前後であり、口縁部が横ナデによってやや外反味にひらく。

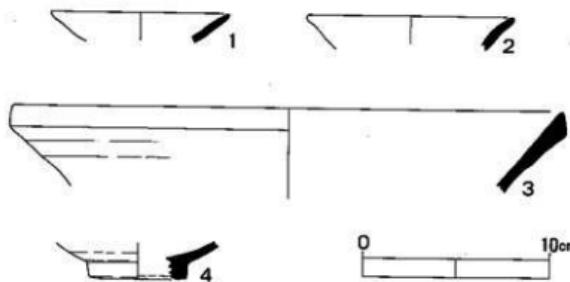
(3 須恵器鉢)

東播系の鉢である。復元口径は29.3cmである。

(4 白磁碗)

高台部分にあたり、外面の釉薬が高台部と接するやや上あたりでまで掛けられている。

この他に図化できなかったが、内面のミガキは粗雑で、外面にほとんどミガキが認められない瓦器碗の破片が多くみられた。また青磁片も1点出土している。これらの遺物は、概ね鎌倉時代に相当するものである。



第6図 出土遺物実測図

3. 高城遺跡の発掘調査

(第2期調査)

(1) 調査の経過

発掘調査は、高城遺跡内において、住宅の建築が計画されたため、遺構・遺物の包蔵状況を確認するため、事前に実施したものである。調査については、平成6年7月15日に、重機を用いて行った。

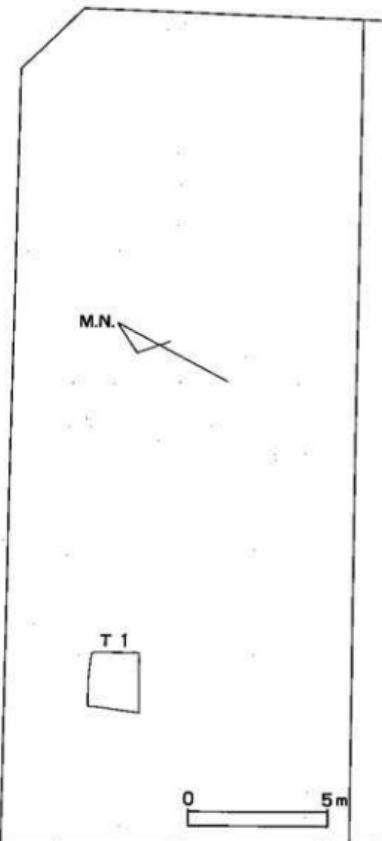
(2) 調査の成果

a. 基本土層序

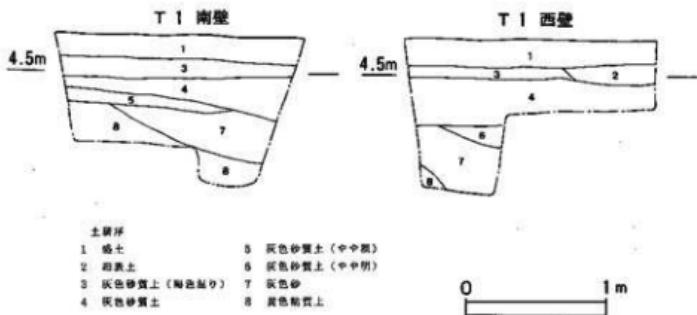
調査地内の土層序は、盛土層、旧表土層以下、主に灰色系の砂質土が堆積し、地山層として黄色粘質土層（第8層）を確認した。灰色砂質土〔褐色混り〕層（第3層）、灰色砂質土層（第4層）中において、中世期及び近世期以降のものと考えられる遺物が含まれているのを確認した。

b. 遺構・遺物

地山層を切り込む形で落ち込みを検出した。落ち込みは約50cmの深さを測る。灰色砂を埋土とする落ち込み内からは、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器等の遺物を検出したが、これらは磨滅が激しく、細片であるため図化することはできなかった。また、調査面積が限られていたため、落ち込みの性格は明らかではないが、層位的に近世期以降のものである可能性が考えられる。



第7図 高城遺跡調査区平面図



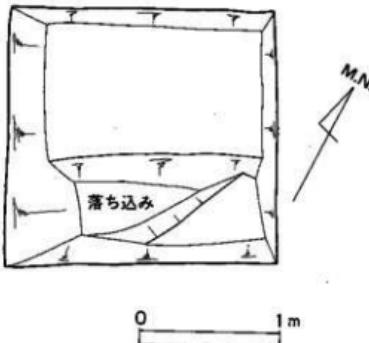
第8図 高城遺跡土層断面図

4.まとめ

第1期調査では、鎌倉時代の遺物とともに溝を1条検出した。調査面積が限られていたため、その全容を明らかにすることはできなかったが、その後、第1期調査地の北西約50mの地点において、ほぼ同時期に相当するものと考えられる遺物包含層と、それに伴ない溝や落ち込みの遺構を検出しており、高城遺跡B地点の包蔵地域がさらに拡大することが判明した。

第2期調査においても限られた調査面積であったため、その性格は明かでないが、層位的に近世期以降のものと考えられる落ち込みを1基検出した。これに伴なう遺物の磨滅は激しく、細片であることから、2次的作用によって堆積したものと考えられる。

以上、2期の発掘調査を行ったが、いずれも限定的な調査であったため、遺跡の全容を解明するに至る成果は得られなかった。しかし、周辺における発掘調査や立会等の成果を合わせみると、遺跡各地点では中世期の遺物が検出されており、第2期調査地南側で11世紀前半に相当する遺物とともに、柱穴、土坑が検出され、また、第1期調査地の北約100mの高城遺跡C地点においても、細片であるが黒色土器、土師器等の遺物とともに、溝や土坑が検出されていることから、当地一帯に平安末～鎌倉時代にかけての集落が展開していたものと考えられる。そして、今後各地点の包蔵地域がさらに拡大するものと予測され、徐々にではあるが、遺跡の全体像が明かになるものと期待される。



第9図 高城遺跡遺構平面図

第3章 片山東屋敷廻遺跡の発掘調査

1. 位置と環境

片山東屋敷廻遺跡（東屋敷廻は小字名）は吹田市藤が丘町の東北端を含む片山町4丁目に所在する。現在、周辺は宅地化されており、旧地形をうかがうことは困難であるが、千里丘陵の東南縁、標高20m付近の斜面に立地している。

千里丘陵は、北摂山地と淀川・安威川の沖積平野との間に半円状に広がる丘陵で、主として未固結の粘土・砂・礫からなる大阪層群に属し、小河川によって開析され波浪状の地形を呈している。このような丘陵斜面の特質と、燃料となる樹木の繁茂、生産及び運搬用の川の存在などの自然的要因は窯業生産を可能にし、丘陵西北縁の豊中地区と東南縁の吹田地区に須恵器窯跡群を展開させることになった。これらを合わせて「千里古窯跡群」あるいは、泉北丘陵の陶邑古窯跡群を「大阪南部古窯跡群」と呼ぶに對比して「大阪北部古窯跡群」とも呼ばれている。千里古窯跡群は、5世紀代から7世紀中葉までの間に100基以上の窯の操業を行っており、古墳時代にこのような高い生産密度と規模を持った窯跡群は、泉北丘陵の陶邑古窯跡群以外、他に類を見ないものである。

吹田地区では、現在56か所の窯跡が確認されており、それらは丘陵の谷筋を単位として、津志長池支群、山田支群、駅迎ヶ池支群、竜が池支群、馬池支群、山の谷支群、佐井寺支群、出口町支群の各支群に区分されている。吹田地区での最古の窯跡は馬池支群に属する吹田32号窯跡で、初期須恵器が生産され、また吹田54号窯跡からI型式1段階（中村浩氏による編年案、以下特記しない限り当編年）に相当する須恵器が採集されており、陶邑古窯跡群とほぼ同時期に須恵器の生産を開始したものと考えられている。しかし、吹田地区で本格的に生産が行われるのは6世紀前半（II型式2段階）になってからであり、馬池支群から出口町支群、そして竜が池支群へと丘陵縁辺部に沿って展開していく。生産のピークを迎える6世紀後半（II型式4段階）には北方の駅迎ヶ池支群に達して生産地域が南北に最大限に伸びる一方、次第に、丘陵縁辺部から丘陵奥部の山の谷支群、佐井寺支群へと拡大していく。この頃には当初より生産を継続していた馬池支群や出口町支群では窯はみられなくなり、生産地が大きく移動したことがわかるが、その一因として、燃料となる薪の大量消費による枯渇が考えられている。7世紀前半（II型式6段階、III型式1段階）になると丘陵奥部の佐井寺支群、山の谷支群に限定され、窯場は急速に閉じられていき、7世紀の中葉にはほとんどの窯が姿を消したようである。それ以降は、7世紀後半、藤原宮期に操業されていた吹田9号窯跡（佐竹台所在）が唯一例外的に認められるだけである。

須恵器は5世紀中葉を前後する頃、韓半島からの渡来工人達によってもたらされ、わが国でも生産が開始されたが、特に、6世紀以後、群集墳が爆発的に造営されたこと、横穴式石室が

古墳の内部主体として大量に導入されたことが葬祭・副葬用として、須恵器の飛躍的な需要の増大をもたらした。吹田地区の窯跡群は、このような状況の中、畿内の膨大な需要の一翼を担う形で、生産が行われたのである。さらに、6世紀末から7世紀にかけては、古墳築造の急務と仏教文化の盛行によって、一般的には、瓦生産を伴う瓦陶兼業窯となり、地方へと拡散していく傾向にあるが、吹田地区の窯跡群は、当初から須恵器主体の生産に専念し、その最終段階においても瓦生産に関与することなく、7世紀中葉の畿内における横穴式石室墳の新たな造営が停止された頃に急速にその活動を停止していった。この時期は、祭祀儀礼的な性格を濃厚に表現した古墳時代の須恵器から、実用的な日常生活の用具としての形態をもった歴史時代の須恵器へと移り変わっていく時期でもあった。

片山東屋敷廻遺跡は馬池支群に近接する緩斜面にあり、須恵器窯跡群との関わりや奈良時代以降の瓦窯跡との関わりが考えられ、また、その自然的、歴史的環境から、他地域との交流という点からも考慮される遺跡である。



第10図 片山東屋敷廻遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)

2. 調査の経過

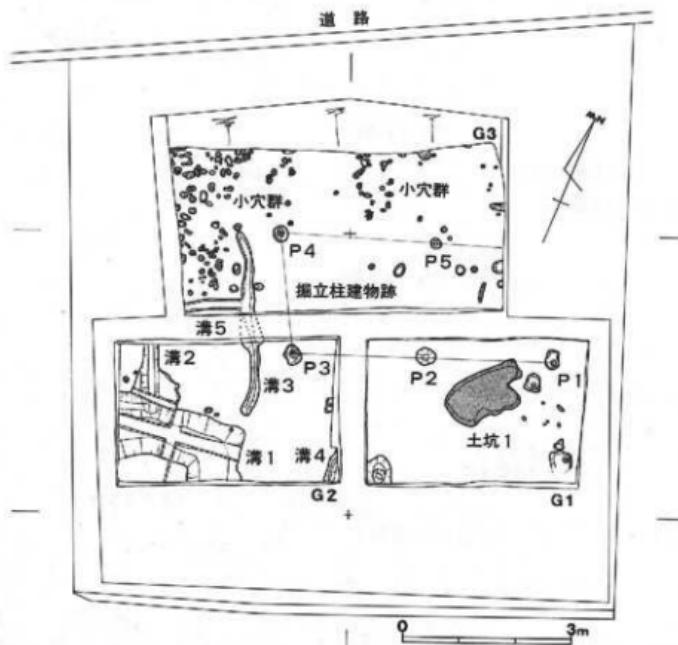
今回の調査は個人住宅建築工事に伴う事前調査として、吹田市片山町4丁目2409-3において実施したものである。調査は平成6年6月24日～7月9日に実施した。調査面積は約50m²である。まず、重機による掘削で遺物包含層までの土層を除去し、それ以下は人力掘削を行った。調査区を北半部、南半部に分け、まず、南半部から始め、G1・2の調査区を設定し、北半部をG3とした。表土層下約80cmで厚さ約10cmの遺物包含層（灰色土）があり、ここからは、須恵器、土師器、黒色土器等が出土し、平安時代以降の所産と判断される。この下には、黄褐色土層があり、この面で溝・土坑・小穴群等の遺構を検出した。これらの写真・図面等の記録作成の後、器材を撤収して調査を終了した。

3. 調査の成果

a. 基本層序及び検出遺構

調査区の基本的な層序は次のとおりである。

I層 盛土（現代）、II層 現代水田耕土、III層 褐色土、IV層 黄茶褐色土、茶灰色土。



第11図 調査区平面図

V層 灰色土(遺物包含層)、VI層 黄褐色土である。V層は遺物包含層で調査区のほぼ全域で認められた。出土遺物は須恵器(杯・甕等)、土師器(杯・甕)、黒色土器が認められるが、細片で磨滅が著しいものが多い。古墳へ平安時代の所産と判断される。VI層は遺構の検出された面で、調査区のほぼ全域に展開している。ほぼ、平坦であるが、北端と南端の比高差が約10cmあり、ゆるやかに南へ下がっている。この面で、土坑1基、溝4条、小穴13か所、小穴群を検出した。以下、各遺構について概略を記す。

土坑1

G1のほぼ中央部で検出したもので、長さ約150cm、幅約80cm、深さ約30cmを測る。堆積土は灰褐色土で、堆積土の上部で須恵器甕口縁部と体部が押し潰された状態で出土した。当初、土器棺として埋納されたものと思われ、精査を進めたところ、口縁部は大型甕、体部は中型甕で別個体であること、破片も完形に復元するには少ないことがわかり、壊れたものを廃棄した土坑と思われる。甕以外には杯身の細片が出土した。

溝1

G2南西部でL字状を呈する部分を検出した。幅約95cm、深さ約30cmを測る。溝内堆積土は、暗茶褐色土、灰褐色土の2層で、少し粒状の炭を含んでいた。溝の南側平坦面は、少し高さが下がるが、小穴等の遺構は認められず、北側の方で、溝の肩部に4か所、やや内側へ入った部分に1か所の径約10cmの小穴が認められた。溝内堆積層からは須恵器、土師器が出土したが、細片で磨滅の著しいものがほとんどで、形成時期については不明である。

溝2・3・5

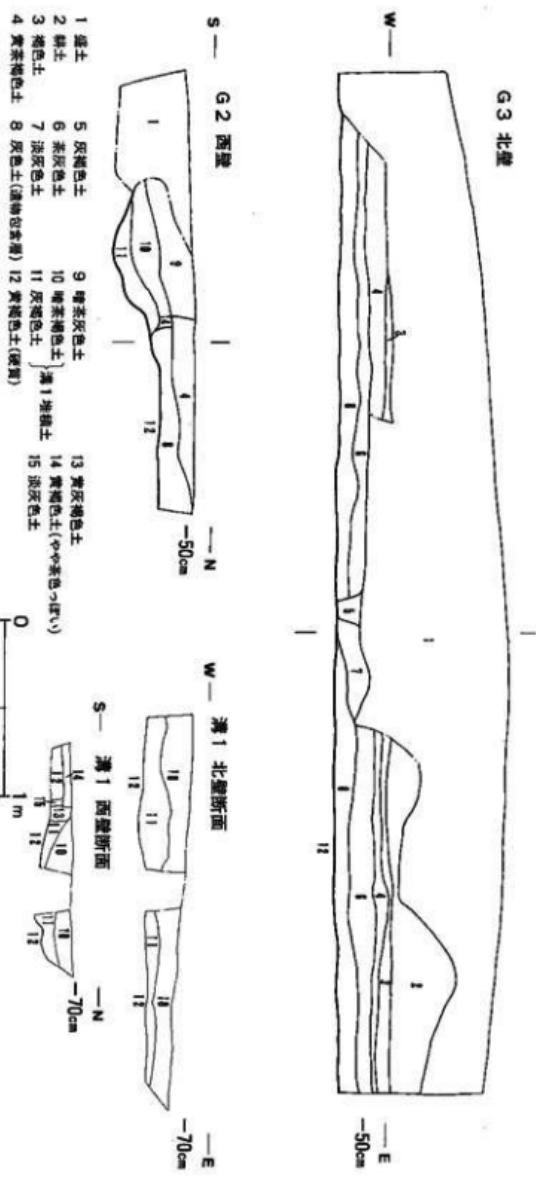
溝2はG2の北西部で南下するもので、ラッパ状に広がる先端は溝1に削られている。幅約25cm、深さ約10cmを測る。溝3はG3～2にかけて検出した南北方向のもので、溝1の手前でとぎれている。溝2と方向が同じである。検出長約320cm、幅約20cm、深さ約4cmを測る。溝5は溝3の直角方向に西へ伸び、幅約20cm、深さ約7cmを測る。溝2・3間は約160cmである。溝底のレベルは溝5が高く、溝3が低い。溝2と3は並行し、溝3と5及び溝2と5が直交するもので、何らかの施設を構成するものと思われるが、これ以上には明らかにできなかつた。

溝4

G2南東隅で検出し、幅約15cm、深さ約20cmを測る、南北方向の小溝である。北側は途中でとぎれている。溝3とは方向が少し異なる。

掘立柱建物跡

G1～3で検出したもので、P1～5で構成される2×1間のものである。P1・3・4では柱痕を認めることができ、それぞれの柱痕径は約10cmである。柱間距離はP1～2間226cm、P2～3間225cm、P3～4間212cm、P4～5間275cmを測り、平面形状は台形を呈する。その内部には7基の小穴を認めたが、その位置に規則性は認められない。溝3とは配置の方位がほぼ同じであることから、溝2・3・5が付随するのかもしれない。P4等から土師



第12圖 土層断面図

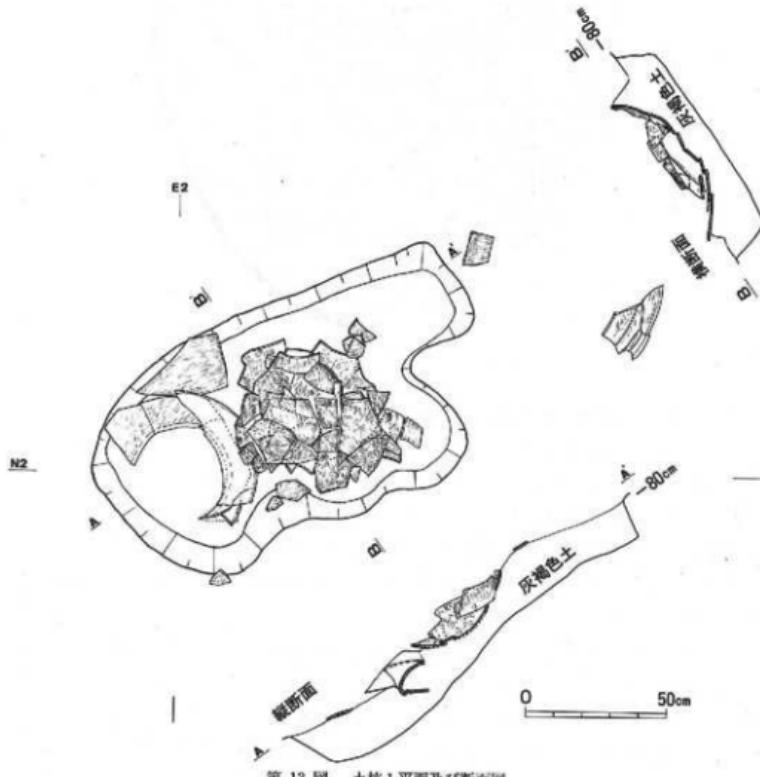
器、須恵器が出土したが、細片であり、時期の特定は困難である。

小穴群

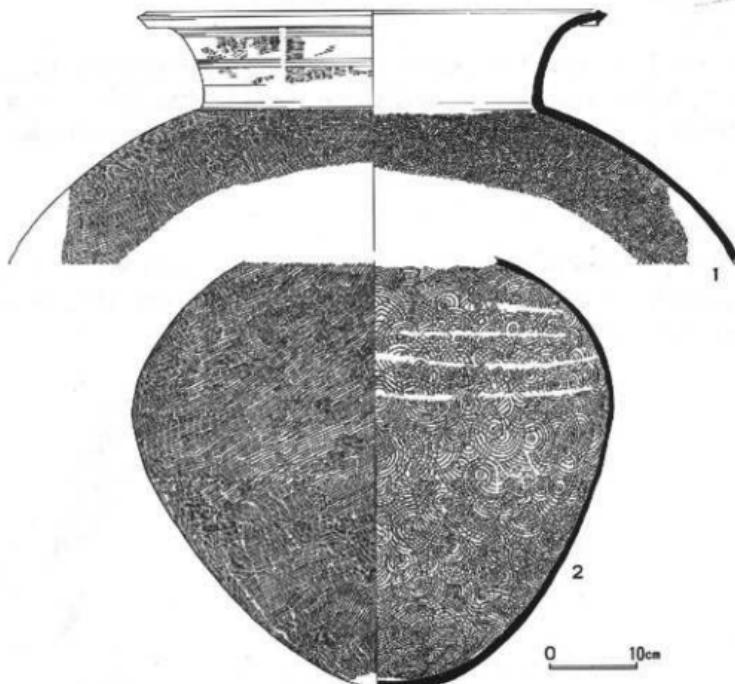
G 3 西端部及び北端部で集中して検出した。10cm×10cm大から20cm×14cm大の楕円形のものがあり、深さ約5~10cmである。合計140か所検出され、中には人の足跡と思われるものも数か所認められた。ただ、規則性が認められないので、足跡とは断定できない。出土遺物は極めて少なく、年代を推定できるものはない。

b. 出土遺物

遺物包含層、各遺構等から古墳時代～平安時代の遺物をコンテナー8箱分検出した。土坑1出土遺物を除けば、細片で、磨滅の著しいものがほとんどである。ここでは、図化できたものの概略を記すこととする。



第13図 土坑1平面及び断面図



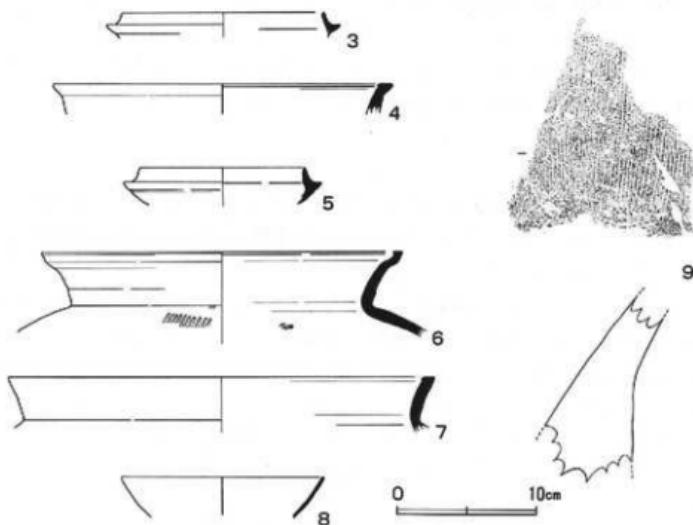
第14図 出土遺物実測図(1)

(1) 土坑1出土遺物(第14図1・2、第15図3)

(1)は須恵器大型壺の口縁～肩部である。復元口径52cm、残高29cmを測る。口頸部は大きく外反気味に伸び、口縁端部は上方に肥厚し、下端に断面半円形の凸帯を貼り付けている。頸部には2条1対の凹線で横帯をつくり、その中は斜め右上りのハケ(6条/cm)を施しているが、大部分はナデ消されている。体部は外面は斜めタテ方向の平行タタキ、内面は同心円タタキを施している。胎土、焼成等から播磨産と思われ、口縁端部の形状は、淡路新宮窯跡出土須恵器壺に類似例がある。8世紀頃の所産と考えられる。

(2)は須恵器壺の体部である。最大腹径55.4cm、残高1.8cmを測る。外面は右上がりの平行タタキを施した後、部分的に水平方向にナデを施す。部分的に押圧調整の痕跡を止めている。内面は同心円タタキを施し、部分的に水平方向にナデを施している。

(3)は須恵器杯身の破片である。復元口径14.2cm、残高1.8cmを測る。口縁端部は内傾しながら上方に立ち上がる。中村編年Ⅱ形式4段階に相当すると判断される。



第15回 出土遺物実測図(2)

(2) 溝1出土遺物(第15図4)

(4)は須恵器甕の口縁部である。口縁端部の細片で、復元口径23.8cm、残高2.1cmを測る。口縁端部は急角度で外反し、端部上端は幅広い平坦面を有する。

(3) V層灰色土(遺物包含層)出土遺物(第15図5～8)

(5)は須恵器杯身の破片である。復元口径11.5cm、残高5.6cmを測る。受部下に、弱い沈線がめぐる。口縁端部はやや鋭い。

(6)は須恵器甕の口縁部である。復元口径25.4cm、残高5.6cmを測る。口領部から外上方に伸びた口縁端部は受口状に屈曲して上方に立上がり、口縁端部は広い平坦面を有する。体部外面はタテ方向の平行タタキ、内面は同心円タタキを施しているが、大部分ナデ消されている。胎土、焼成等から播磨產と思われ、加古川市西ノ池1・2号窯跡出土須恵器の甕に類似例がある。8世紀頃の所産と考えられる。

(7)は須恵器甕の口縁部である。復元口径30cm、残高3.6cmを測る。(4)と同様であるが、口縁端部外面の屈曲角度は小さい。

(8)は黒色土器A類の口縁部である。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。復元口径14.2cm、残高2.9cmを測る。

(4) II層(水田耕土層)出土遺物(第15図9)

(9)は土師質陶棺の蓋である。18cm×14cmの小片で、屋根形陶棺の蓋軒先部である。蓋の受け部には1条の凹線が残っており、身を受けるようになっている。外面は縦方向のハケメ調整、内面は指頭による押圧の後、ナデ調整を行っている。焼成はやや不良である。

4. まとめ

今回の片山東屋敷廻遺跡の発掘調査は、狭い範囲内でなされた調査であるが、本格的な調査は初めてである。今回の調査においては、奈良時代の遺構と古墳～平安時代の遺物が出土した。これらを時代ごとに述べてみたい。

まず、古墳時代については、明確な遺構を検出しなかった。遺物については、杯身等の細片が遺物包含層と土坑等から出土した。当調査区に隣接して、これらと同時期頃の須恵器を焼成した窯跡群が位置している。出土した須恵器は細片であることと出土状況から、近隣の窯跡群から排出され、流れ込んだものと思われる。また、陶棺も出土したが、磨滅が著しく、水田耕土層出土であることから、原位置にあるものではない。須恵器窯跡で生産されたものか、古墳の内部主体として埋納されたものが破壊され、排出されたものであるのかは不明である。

次に、奈良時代については土坑、溝、掘立柱建物跡、小穴群等の遺構を検出した。このうち、土坑については、当初、土器館を埋納したものとも思われたが、精査の結果、須恵器窯の廃棄坑と判断された。また、掘立柱建物跡は、東西方向に長い1×2間のものであり、東側は調査区域外になるので、さらに、東側に伸びる可能性もあるが、柱掘方の大さき、柱直径よりみて、大規模な建物であるとは考えがたい。溝3・5は細く、浅いものであり、その方位と位置関係からみて、掘立柱建物跡に伴う排水溝と考えることも可能である。遺物については、土坑および遺物包含層から須恵器が出土し、そのうち土坑出土須恵器窯は口縁の形態、胎土・焼成の状況から播磨産と考えられるに至った。

さて、検出した遺構・遺物の性格については、まず、当地は須恵器窯跡群の馬池支群に隣接することから、須恵器窯跡群との関連について述べると、千里古窯跡群では7世紀中葉頃にはほとんど生産を行わなくなってしまっており、7世紀後半頃の吹田9号窯が認められるにすぎない。しかも、播磨産と思われる須恵器が遺構から出土したことでも考え合わせて、当地の須恵器生産とは直接、関連がないといえる。一方、当地から北東1.6kmの所に聖武朝難波宮造宮瓦窯である七尾瓦窯跡が位置し、これが数少ない同時期頃の遺跡である。七尾瓦窯跡周辺には大溝や小穴群、掘立柱建物跡等の工房関連遺構群の展開することが近年の調査で判明しつつあり、やや離れた距離にある当地が七尾瓦窯の生産者集団の居住域の可能性も考えられたが、古墳時代の須恵器生産の工人たちの居住域が丘陵縁辺部の南側の平地にあると推定されており、七尾瓦窯⁽¹⁶⁾でも同様の可能性があることからみて、両者を結び付けるものは今のところなく、その関係については明らかでない。

以上のように、奈良時代の集落跡の一部と思われる遺構とそこで使用されたと思われる遺物

を検出したことは成果といえるが、調査は緒に付いたばかりであり、遺跡の性格にまで言及することができなかった。今後の周辺調査の進展に期待したい。

註) 藤原 学「須恵器窯と燃料薪」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』1993.3



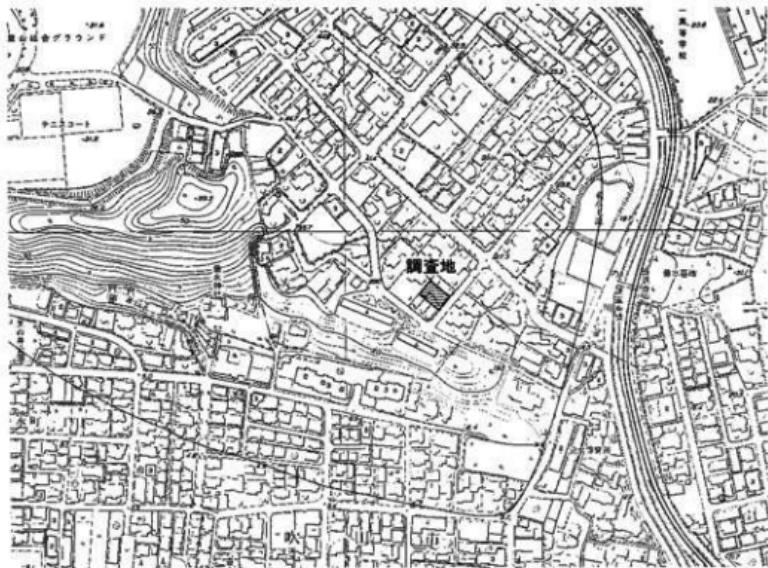
第 16 図 調 査 風 景

第4章 垂水遺跡の調査

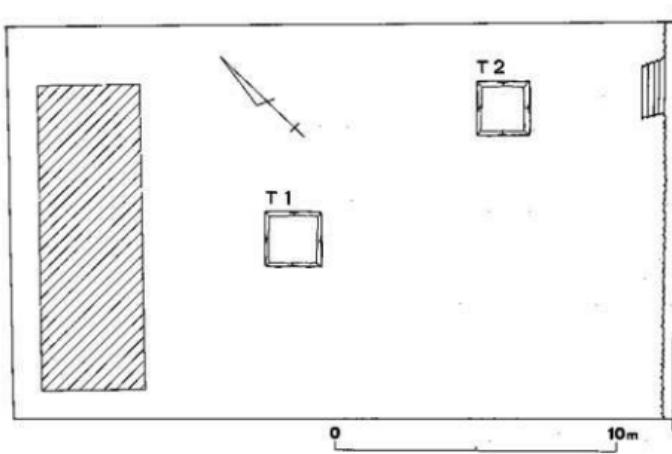
垂水遺跡の発掘調査（通算第21次）は円山町168-28において、住宅建設工事に伴う確認調査として実施した。調査地は垂水遺跡の東南端近くに当たり、弥生時代後期の竪穴住居址等が調査された地点の東200mの地点であるが、調査地一帯は早い時期に宅地開発によって大きく造成されており、旧地形は既に失われている。

調査は遺構・遺物包含層の展開状況を確認することを目的として、平成6年8月4日に実施した。建設予定範囲内に 2×2 mの試掘トレンチを2ヵ所（T1・T2）設定し、表層の掘削は重機を使用して実施した。

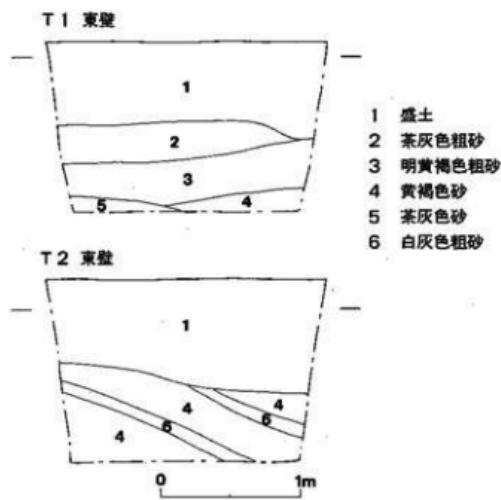
各トレンチの土層の堆積状況は、宅地造成に伴う盛土層以下は、粗砂層の堆積が続き、特にT2では丘陵下方の東～東南方向に向かって粗砂層が上方から流れ込む状況で堆積するのを確認した。遺構・遺物包含層は認められず、遺物も出土しなかった。調査は工事掘削予定深度である現地表下1mまで掘削を行うが、明確な遺構・遺物包含層は確認できず、地山層自体、既に削平されているものと判断された。



第17図 垂水遺跡調査地周辺図 (S=1:5000)



第 18 図 垂水遺跡調査区平面図



第 19 図 垂水遺跡調査トレンチ土層断面図

報告書抄録

ふりがな	へいせい 6ねんどまいぞうぶんかざいきんきゅうはくつちょうさがいほう						
書名	平成6年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報						
副書名	高城遺跡B地点 高城遺跡 片山東屋敷廻遺跡 垂水遺跡						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者名	増田真木 西本安秀 賀納章雄						
編集機関	吹田市教育委員会						
所在地	〒564 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)384-1231						
発行年月日	西暦 1995年3月31日						

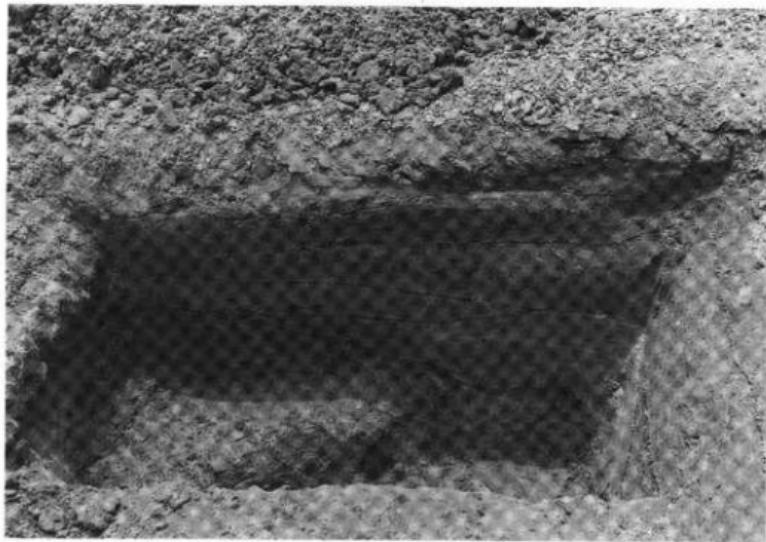
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"/>	東経 °'\"/>	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高城遺跡B地点	吹田市高城町1350-3	27205	122	34° 45' 27"	135° 31' 53"	19940509	6	建物の建築
高城遺跡	吹田市高城町1401、1402-1	27205	114	34° 45' 32"	135° 32' 00"	19940715	4	建物の建築
片山東屋敷廻遺跡	吹田市片山町4-2409-3	27205	71	34° 46' 11"	135° 31' 42"	19940624～ 19940709	50	建物の建築
垂水遺跡	吹田市円山町168-28	27205	86	34° 45' 51"	135° 30' 28"	19940804	8	建物の建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高城遺跡B地点	集落遺跡	中世	溝1条	瓦器、須恵器 土師器、磁器	なし
高城遺跡	集落遺跡	中世 近世	落ち込み	弥生土器、瓦器 須恵器、土師器	なし
片山東屋敷廻遺跡	集落遺跡	古墳時代 奈良時代	溝5条 小穴群 土坑1基 掘立柱建物跡1棟	須恵器、土師器 黒色土器 陶棺	奈良時代の集落跡 を確認
垂水遺跡	集落遺跡		なし	なし	なし

図版一 高城遺跡 B 地点・高城遺跡



第1期調査 T2内溝検出状況

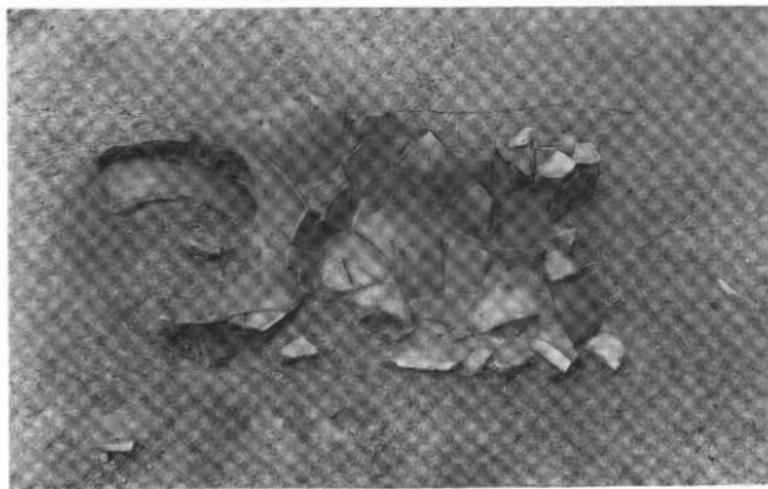


第2期調査 T1調査状況(北から)



G 1:2(西から)

土坑1 棚出状況(南から)

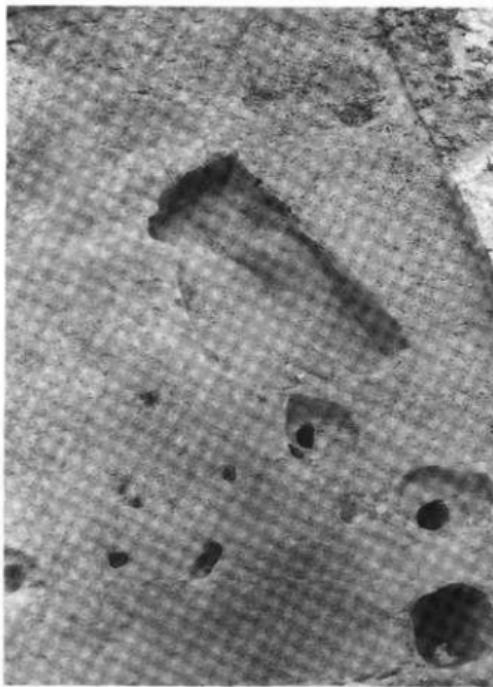


図版三 片山東屋敷廻遺跡2

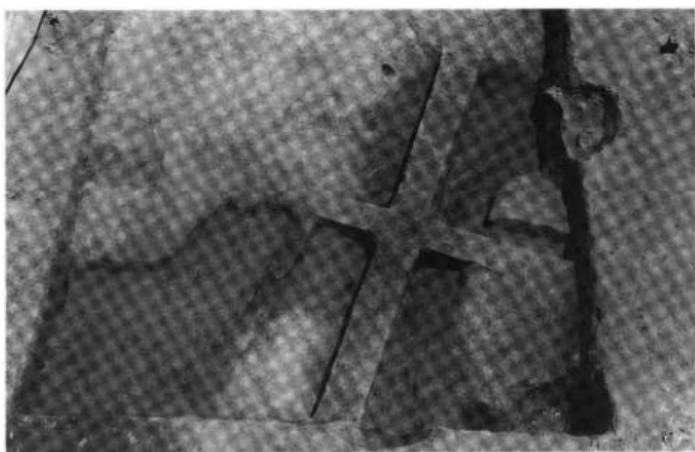
土坑1細部(南から)



土坑1能遺構検出状況(東から)



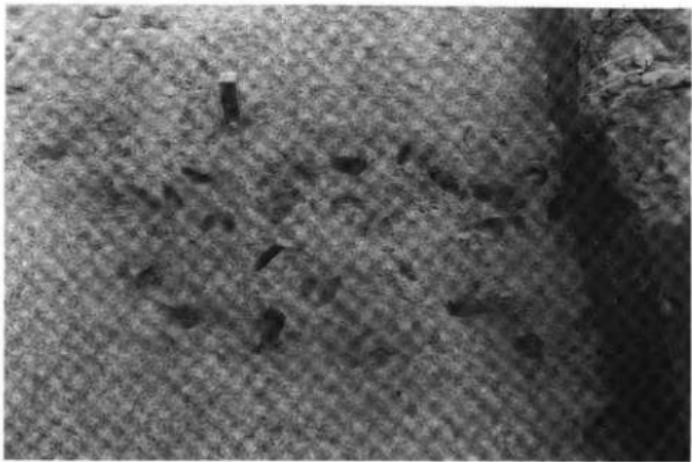
溝1(西から)



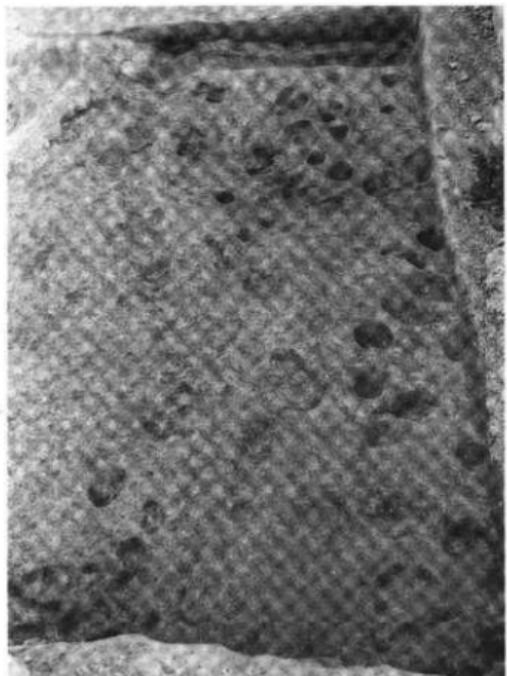
溝1(東から)



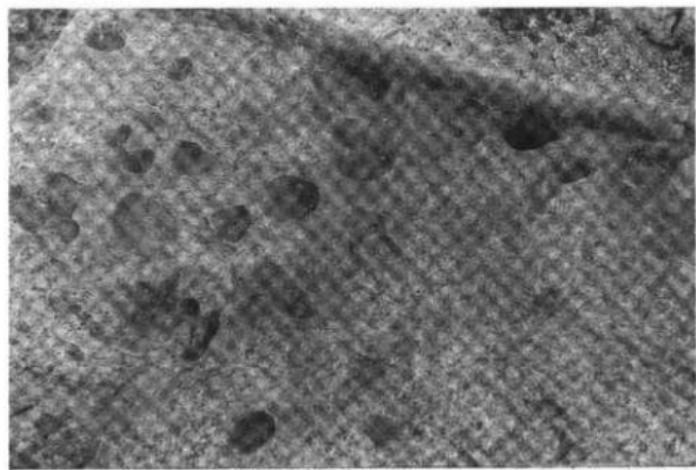
圖版五 片山東屋敷廻遺跡 4



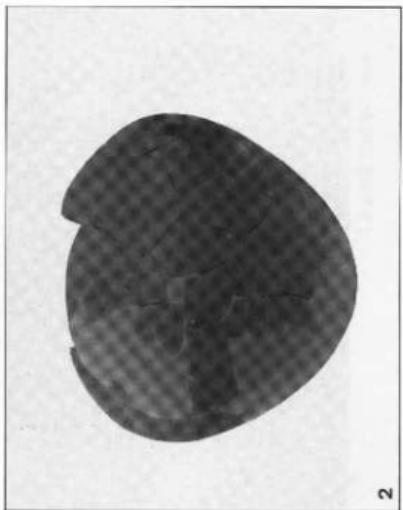
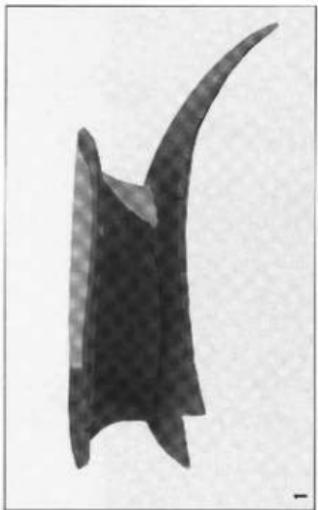
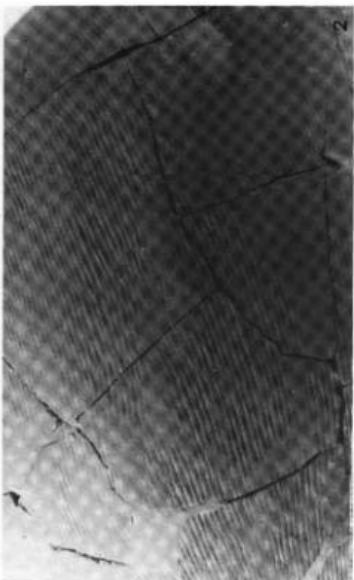
図版六 片山東屋敷廻遺跡5



小穴群1、溝3・5(北から)



小穴群1-細部(北東から)



出土須恵器

図版八 垂水遺跡

調査地近景(南東から)



T-1 土層断面(南西から)



〔平成 6 年度〕

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

高城遺跡 B 地点

高 城 遺 跡

片山東屋敷遺跡

垂 水 遺 跡

平成 7 年 3 月 31 日

編 集 吹田市泉町 1 丁目 3 番 40 号

発 行 吹 田 市 教 育 委 員 会